

# ふるさとの文化財

河北地区文化財保護委員会



## ふるさとの文化財第2集正誤表

### ◎ 訂正箇所

		誤	正
☆ 41ページ	釜神概説 7行目	土製	木製
☆ 66ページ	元応の碑（注）2行目	秋の彼岸	彼岸
☆ 68ページ	延元の碑写真下説明	河北町三輪田	河北町針岡
☆ 102ページ	北上大堰を望む概説中の 根岸地区と向いの外吉野		山崎地区と向いの根岸
☆ 121ページ	武家屋敷写真下説明	桃生町神取	桃生町城内
☆ 126ページ	キリシタン類族帳概説1行目		
		小池の伊藤氏宅	小池の千葉信夫氏宅
☆ 137ページ	釜神の所有者として		高橋昇氏宅を入れる



### ◎ すでに訂正（シール）された箇所

☆ 40ページ	概説中	4氏の敬称略
☆ 51ページ	地図中	古木（桜） 古木（赤松）
		古木（赤松） 古木（桜）
☆ 100ページ	二枚貝の化石概説1行目	15,000年前 15.000万年前
☆ 114ページ	写真下説明	十王像 不動明王像
		不動明王像 十王像

河 北 地 区

# ふるさとの文化財

資料第二集

河北地区文化財保護委員会

## 発刊のことば

第二集の発刊のことばを書くにあたって、あらためて第一集の一ページ一ページをめくってみて、わたしたちの祖先が、この郷土の中に生き、創造し、伝承し、保存してきた文化財の数々が、わたしたちの生活の中に深まりを与え、そういうものと共に生きる環境でなければ、わたしたちの心の、魂の安らぎというものはないのではないかと思うわけです。

戦後の経済の高度成長、急激な社会構造の変動、価値観の多様化などによって美しい自然が破壊されたり、歴史的にも学術的にもすぐれた民族の伝統的な文化がすたれしていくことは、わたしたちの心のふるさとを失うことであり、耐えがたいことです。

そういう背景の中にあって、河北地区の文化財保護委員の方々が、第一集刊行以来三年余の歳月を費やし、もと奥州大学教授司東真雄氏や東北学院大学教授佐々木慶市氏のご指導を受けながら足を運び、汗を流し、心血を注いで収集した膨大な資料を整理し、執筆され、このたび第二集として発刊することになりましたのは大変意義深いことです。

本書をひもとき、これ等の文化財を形成した時代の過去の文化を尊び、そこにひそむ、わたしたちの祖先の魂なり心というものを大切にしようということになれば、文化財保護の精神につながるものであり、そこから自然や伝統を重んじた豊かな河北地区的文化的風土を形成する新たな創造的活動が生まれてくるものと信じます。

最後に、本書の発刊にあたり、ご多忙を極める中で資料収集から執筆にあたられた文化財保護委員の方々、ご指導くださった先生方ならびに資料提供などいろいろご協力くださった方々に深甚なる感謝の意を表します。

昭和51年12月

桃生郡河北地区教育委員会 教育長

浜田 九重郎

[本書作製者]

河北地区文化財保護委員会

委員長 立花改進(河北)  
副委員長 紫桃正隆(河北)  
委員 武山梅玄(北上)  
委員 狩野善夫(河北)  
委員 及川健吉(桃生)  
委員 館田虎弥太(北上)  
委員 川村昭道(桃生)  
委員 西條久雄(北上)  
委員 伊藤良一(河北)  
委員 芳賀良山(桃生)

編集委員

紫桃正隆  
館田虎弥太  
及川健吉

事務局

佐々木芳隆(地教委社教主事)  
木村良博(地教委社教主事)  
佐々木賢治(石巻教育事務所社教主事)

写真

梶原侃(河北町役場)  
西條理(北上町公民館長)

---

---

## 目 次

---

発 刊 の こ と ば

口 絵 カ ラ ー 写 真

年 表

北 上 町 の 部

河 北 町 の 部

桃 生 町 の 部

編 集 後 記

---

——大河「北上」の流れ果つるところ——

新北上大橋を中心に、追波湾を望む……



時代 区分	古代			中世				近世			時代 区分	
	天文	地	星	月	日	月	星	月	日	月	星	
西周紀元	B.C. 三〇〇	五六四三	七〇八	七八二	一〇〇	一一〇	一二〇	一三〇	一三五〇	一四六七	一五九六	一八六七
西周紀元	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

〔吉川弘文館史料〕

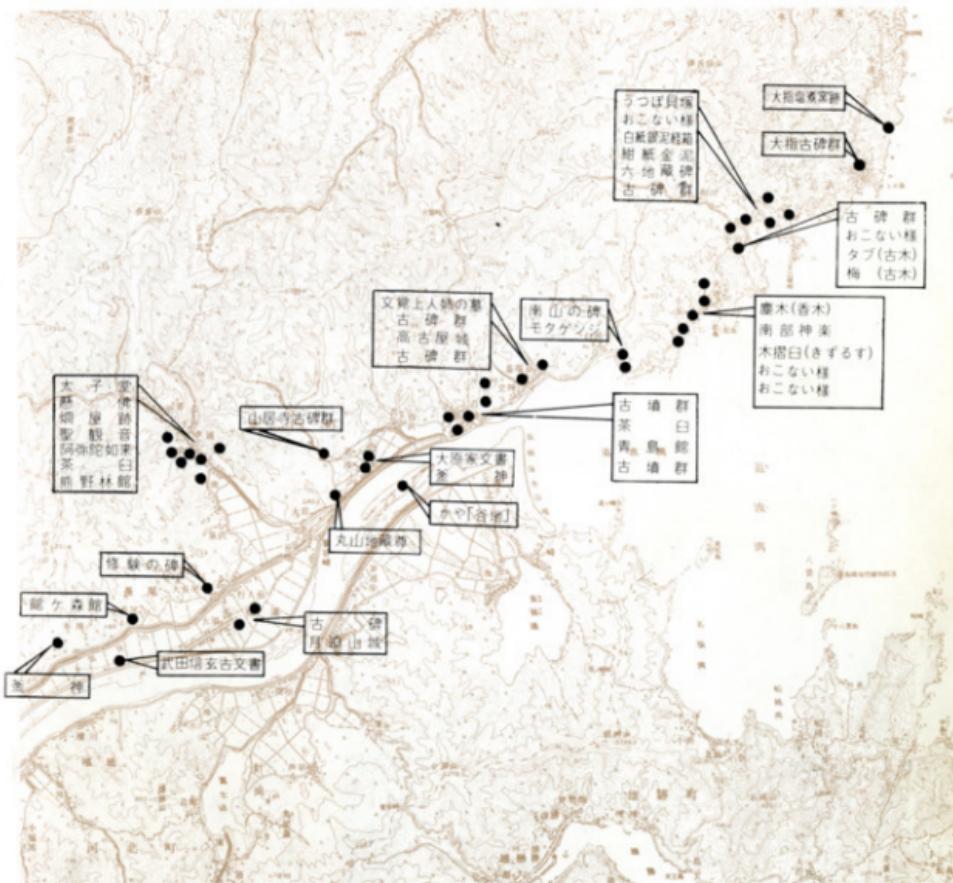
年表													号表													附年号の読み方												
天化	645	649	天	安	857~	58	長	和	1012~	16	元	永	1118~	19	正	嘉	1257~	58	正	平	1346~	69	(139)	合	(江戸)	戸	文	化	1804~	1								
白雉	650~	54	貞	觀	859~	76	寔	仁	1017~	20	仲	安	1120~	23	正	元	1259	建	德	1370~	71	応	永	1394~	1427	慶	長	1596~	1614	文	政	1818~	29					
白虎	672~	85	元	慶	877~	84	治	安	1021~	23	天	治	1124~	25	文	中	1372~	74	正	長	1428	元	和	1615~	23	天	保	1830~	43									
朱雀	686	仁	和	885~	88	万	寿	1024~	27	天	治	1126~	30	弘	長	1261~	63	天	授	1375~	80	永	享	1429~	40	寛	永	1624~	43	弘	化	1844~	47					
大宝	701~	03	武	昌	889~	97	其	元	1028~	36	天	承	1131~	37	文	承	1264~	74	弘	和	1381~	83	嘉	吉	1441~	43	正	保	1644~	47								
大寶	704~	07	昌	泰	898~	900	長	財	1037~	39	其	承	1132~	34	文	承	1264~	74	弘	和	1381~	83	嘉	吉	1441~	43	正	保	1644~	53								
(雍良)	延喜	901~	22	長	久	1040~	43	仲	延	1135~	40	(雍良)	延喜	1040~	43	正	治	1275~	77	元	中	1384~	92	文	安	1444~	48	寛	安	1648~	51	安	政	1854~	59			
和氣	708~	14	延	長	923~	30	寔	德	1044~	45	水	治	1141~	45	正	延	1278~	87	(北朝)	宝	德	1449~	51	承	応	1652~	54	万	延	1860~	63							
和氣	715~	16	承	平	931~	37	永	承	1046~	52	寔	治	1142~	43	正	延	1288~	92	元	祐	1329~	31	寔	德	1452~	54	明	財	1655~	57	文	久	1861~	63				
天老	717~	23	天	壽	938~	46	天	壽	1053~	57	天	壽	1144~	57	正	仁	1293~	98	正	慶	1332~	33	康	正	1455~	56	万	治	1658~	60	元	治	1864~	67				
神龜	724~	28	天	壽	947~	56	康	平	1058~	64	久	安	1145~	50	正	仁	1293~	98	正	慶	1332~	33	康	正	1457~	59	寔	文	1661~	72	慶	永	1865~	67				
天平	729~	48	天	德	957~	60	治	曆	1065~	68	仁	平	1151~	53	正	安	1299~	01	建	武	1053~	37	長	嘉	1457~	59	寔	文	1661~	80	(近代)	寔	文	1673~	80			
天平	749~	56	天	和	961~	63	延	久	1069~	73	久	寿	1154~	55	正	延	1302~	01	寔	財	1058~	41	寔	正	1460~	65	寔	宝	1673~	80	(近代)	寔	文	1688~1912				
天平勝宝	749~	56	康	保	964~	67	承	保	1074~	76	久	元	1156~	58	正	仁	1303~	05	康	永	1342~	44	文	正	1466~	66	天	和	1681~	83	明	治	1868~1912					
天平宝字	757~	64	天	和	968~	69	承	財	1077~	80	平	治	1159~	59	正	仁	1306~	07	久	和	1345~	49	寔	仁	1467~	68	寔	享	1684~	87	大	正	1912~	26				
天平神護	765~	66	安	和	970~	72	永	保	1081~	83	寔	財	1160~	60	正	寔	1308~	10	親	慶	1350~	51	文	可	1469~	68	元	禄	1688~1703	昭	和	1926~	67					
神護景雲	767~	69	天	延	973~	75	寔	德	1084~	86	寔	保	1161~	62	正	寔	1319~	20	久	治	1362~	67	文	龟	1501~	03	文	文	1736~	55	定	了一定のものでな	く文獻によつてま					
天寶	770~	80	天	延	976~	77	寔	治	1087~	93	寔	寔	1163~	64	正	寔	1321~	23	寔	安	1368~	74	水	正	1504~	20	寔	保	1741~	43	大	正	1912~	43				
天寶	781~	81	(平)	(安)	978~	82	寔	保	1094~	95	寔	万	1165~	65	正	長	1311~	05	文	和	1352~	55	正	享	1487~	88	至	永	1704~	10	読み方は慣例によつて大体正しいと	思われるものによつたが、必ずしも	く文獻によつてま					
延喜	782~	805	天	和	983~	84	寔	長	1096~	96	仁	安	1166~	68	正	和	1324~	16	寔	和	1356~	60	寔	徳	1489~	91	正	徳	1711~	15	続した西暦時代。	はない。数字は羅						
天平大同	806~	09	寔	和	985~	86	承	徳	1097~	98	寔	寔	1169~	70	正	文	1317~	18	康	保	1361~	00	寔	徳	1492~	00	寔	徳	1716~	35	定したもののでな	く文獻によつてま						
天平弘仁	810~	23	水	延	987~	88	寔	康	1099~	1103	承	寔	安	1171~	74	天	福	1319~	20	寔	治	1362~	67	文	龟	1501~	03	大	正	1912~	43	一定したもののでな	く文獻によつてま					
天平承和	824~	33	天	延	989~	94	寔	長	1104~	05	寔	元	1175~	76	正	寔	1331~	33	至	徳	1384~	86	弘	治	1555~	57	明	和	1764~	88	寔	徳	1781~	88	に分けられたものでは改元の年をも含めた。			
天平承和	847~	43	正	徳	990~	94	寔	寔	1106~	07	寔	寔	1177~	83	正	寔	1331~	33	至	徳	1384~	86	弘	治	1555~	57	明	和	1764~	88	に分けられたものでは改元の年をも含めた。							
天平承和	848~	50	天	延	995~	98	寔	寔	1108~	09	寔	寔	1181~	84	正	寔	1331~	33	至	徳	1384~	86	弘	治	1555~	57	明	和	1764~	88	に分けられたものでは改元の年をも含めた。							
天平承和	851~	55	長	保	999~	1003	天	永	1110~	12	寔	寔	1182~	84	正	寔	1340~	45	寔	徳	1390~	93	文	禄	1592~	95	寔	徳	1781~	88	に分けられたものでは改元の年をも含めた。							
天平承和	854~	56	寔	弘	1004~	11	永	久	1113~	17	寔	寔	1182~	84	正	寔	1340~	45	寔	徳	1390~	93	文	禄	1592~	95	寔	徳	1781~	88	に分けられたものでは改元の年をも含めた。							

## 北上町の部

古	城	館	址	.....	13	
神	像	仏	像	.....	17	
古			碑	.....	21	
古			墳	.....	27	
貝			塚	.....	29	
建			築	.....	30	
無	形	文	化	財	.....	31
器				物	.....	32
香				木	.....	33
美	術	工		芸	.....	34
文				書	.....	36
民	間	信		仰	.....	40
旧				跡	.....	42
古				木	.....	44
自				然	.....	46

注 位置を表わす「町の北約○km」或は「町の南約△km」は、それぞれの町役場の所在地を基点としての距離です。

## 北上町の文化財



# 古城館址

## 高古屋城址

位置 北上町月浜（旧十三浜村），  
町の東北約 0.7km



高古屋城址（北上町月浜）No.1

高さ 100m，城郭の規模は壮大で、西は大盤峠の道より志津川町旧戸倉村へ通じる道筋（往昔の平泉への旧街道）にまたがり、東西約 300m，南北は 500m にも及ぶ。

### 概説

月浜部落の北面に立ちふきがる連峰のうち最も東寄り、一段と高い独立形となった山の頂上部が高古屋城のあとで、平泉藤原秀衡の五男、日詰五郎季衡の居城と伝えられる。



高古屋城址（北上町月浜）No.2

## 青島館址

位置 北上町月浜（旧十三浜村），町役場裏山

### 概説

北上町役場の裏山、三角形にそびえる杉山がそうで、追波の旧家、佐々木治郎氏の所蔵の藩政時代の絵図面にも役場裏山を青島館と記してある。しかし、「風土記」には、一高さ30間、南北35間、東西70間、右御館主並びに年代共に相知申さず候事。当時は畠に罷成

り候事一とあるので、この急峻の山だけが青島館とは考えられない。むしろ、その本丸部は西に続く高台（月浜古墳群のあるところ）がそれで、役場裏山は物見台であったと想像できる。今後の研究課題だが、その高台の部も加えると、東西 500m、南北 150m にも及ぶ巨大なものとなる。



青島館址（北上町月浜）

## 熊野林館址

位 置 北上町女川字中原（旧橋浦村），町の西約5km

### 概 説

女川部落の「館屋敷」と呼ばれる佐々木富雄氏屋敷の裏に位置する山の頂上に館あとがのこっている。その山腹には熊野権現が祭られている。館の名はこの神社に由来したものであろう。

高さ60mほどの頂上部に東西150m、南北200mの規模で造構がのこり、特に壇の並びが明瞭である。城制は輪郭式中型の山城と言えよう。「風土記」には、たて20間、よこ30間、千葉雅楽之助の居城とある。ここは卯ノ木城の支城、女川七館のうちの一つであった。



熊野林館址（北上町女川）No.1



熊野林館址（北上町女川）No.2

## 月迫山城址

位置 北上町本地字月迫（旧橋浦村），町の西南7km

### 概説

橋浦の西、月迫部落にあり、皿貝川へ突き出た独立形の杉山が月迫山城のあとである。高さ約70m、東西200m南北150mの規模の山城であるが、現在は頂上部に遺構は少ない。中世末には対岸の釣尾城と呼応して、北上川の要路を抱した急所の城と伝わり、今でも

この「望星敷」の名はこここの望楼の意味があつたものであろう。

「仙台領古城書上」には、東西80間、南北80間、城主は葛西領地の内と伝う、とあるが、古記にある橋浦（天野）氏はこここの城主であったと思われる。



館ヶ森館址 月迫山城址 (北上町月迫)

位置 北上町長尾（旧橋浦村），町の西南5km

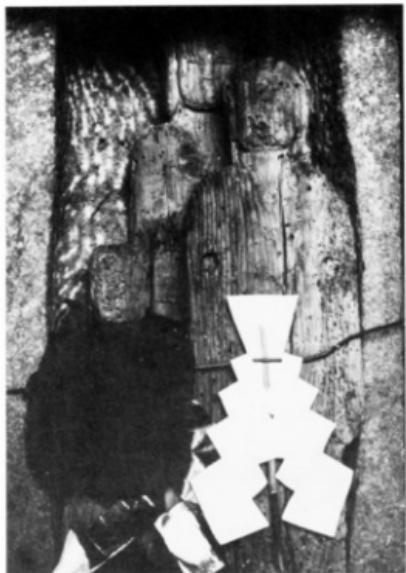
### 概説

長尾の長泉院の地点を基にして、西側、南面に半島状に突き出た杉山の頂上部に館あとが認められる。その規模は東西100m、南北200m、高さ30mほどで、中型連郭式山城と言える。「葛西真記録」には長尾館（館ヶ森館）主として長尾隼人の名が見える。



館ヶ森館址 (北上町長尾)

# 神像仏像



聖徳太子像 (北上町女川)

## 聖徳太子像

位置 北上町女川字道行(旧橋浦村), 町の西  
約5km

### 概説

女川部落の奥、大沢川の西側の山麓部に建つ太子堂の中に祭られる聖徳太子の像で、「安永風土記」には4体あると記されているが現在は3体しかなく、何れも腐朽が甚だしい。「同風土記」には一古仏大破に付、何れも相知れ申さず候事一とあるので、江戸時代に於ても既にかなり破損がひどかったのであろう。

○外観 3体ともに木彫の一本造りの立像で、材質は桂材と思われる。像高はそれぞれ68cm, 61cm, 41cm。

○製作年代 鎌倉時代と推定される。

○作者不明



## 十一面觀音座像

位置 北上町相川(旧十三浜村), 町の東北  
約6km

### 概説

相川の阿部秋吾氏屋敷に祭られる十一面觀音で、阿部伊勢守が祭祀した仏像と伝えられる。付近には「おいせみね」などの地名もあり、阿部伊勢守は葛西家臣と想像される。

○外観 木彫一本造りの座像で、地方作である。材質は桧と推定さる。像高約45cm

○時代 室町期の作。

○作者 不明。

十一面觀音像 (北上町相川)



阿弥陀如来像 (北上町女川)

### 阿弥陀如来像

### 聖観音像

位置 北上町女川(旧橋浦村)，町の西約5km

#### 概説

女川部落の佐々木富雄氏所蔵の仏像である。同屋敷は「熊野林館址」の項でも述べたが、同家には熊野権現社が祭られ、その家歴は古い。

「安永風土記」には7代相続とあり、その先祖、与兵衛が紀州熊野より当地に移る折、熊野権現の本地仏の分身を受けて当地に祭ったと記録している。

○仏像名並びに外観

#### 〔聖観音像〕

木彫、寄木造り立像、総丈約30cm

〔阿弥陀如来像〕

木彫、寄木造り立像、総丈約30cm

○時代 ともに江戸時代と推定。

○作者 不明。



聖観音像 (北上町女川)

## 鉄造阿弥陀如来像懸仏

位 置 北上町女川（旧橋浦村），町の西約5km

### 概 説

女川部落の佐々木久氏所蔵。同家は熊野權現社で知られる佐々木富雄氏屋敷の分家であった。

この家の「懸仏」は鋳鉄製の阿弥陀三尊で、三面のうち原型を止めるのは一面だけ、他は腐蝕のため像は脱落してしまった。同家の先祖、佐々木与兵衛が紀州熊野より分靈を得て当地に祭ったとの記録があり、この懸仏もその折に伝來したものであろう。

○外 観 円形鉄板径16.5cm、像高 8.5cmの座像。

○時 代 鎌倉時代の作。

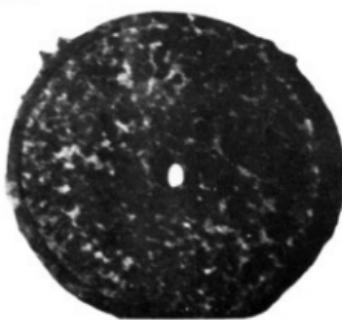
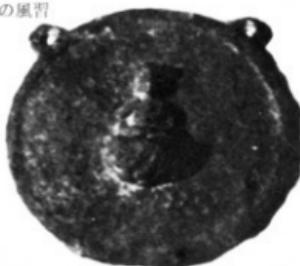
○作 者 不明。

[注] 懸仏

銅、鉄の円板に薄肉彫りの仏像を鋳出すか鋸どめにしたもの。柱や壁間にかけて礼拝する。鎌倉、室町時代に盛んにこの風習が行われた。



阿弥陀如来懸仏（北上町女川） No.1



阿弥陀如来懸仏（北上町女川） No.2

## 丸山地蔵尊（石仏）

位 置 北上町追波（旧十三浜村）。町の南西約2km

### 概 説

追波部落の丸山の麓に「丸山地蔵」という大型の石の地蔵尊が鎮座する。寛政9年（1797年）に建てられた割合に歴史は新しいものだ

が、高さが1.57mもあり、近郷近在の信仰がきわめて篤く、毎年9月29日の縁日には参詣人で大層な賑わいを呈してきた。

施主、追波の佐々木次郎氏。



丸 山 地 蔵 尊 （北上町追波）

# 古 碑

## 古 碑(板碑)

位 置 北上町本地字館下(旧橋浦村),町の西  
南 7 km

### 概 説

橋浦本地の月迫の路傍に花崗岩の板碑3基立っている。ともに高さは85~100cm,巾35~47cm,厚さ7cm位。種子の刻みのみで紀年号は見えないが、種子(梵字)の刻みや様式などから鎌倉末期の碑と推定できる。



小 泊 の 古 碑 群 (北上町小泊)



鎌倉末期の碑 (北上町本地)

## 小泊古碑群

位 置 北上町小泊(旧十三浜村), 東北約5km

### 概 説

小泊部落の北面にあたる山の突端部,中腹から頂上にかけ,百数十基にも及ぶ古碑群が見られ,板碑の群立としてはここが河北地区内最多である。紀年号は正応(1288年)から康応(1389年)の、いわゆる鎌倉時代から南北朝時代にかけてのものが多いのも一つの特徴である。また、異色なのは男女27名にも及ぶ逆修一結衆碑が見られることで、地区内にはその類例がない。

[注] 逆修一結衆碑

死後の往生、菩提の料として生前に供養の碑を立て善根を積むことを逆修碑と言うが、この善根を一つの講中、結衆の名で行ったものを逆修一結衆碑と呼ぶ。これには「一結衆19人」などとか「一結衆」のほか細かな連名を刻するのが一般的である。

## 長塩谷古碑群

位 置 北上町長塩谷（旧十三浜村）、町の北  
東約2km

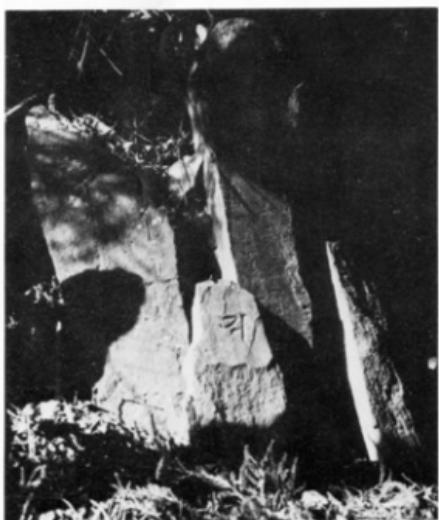
### 概 説

長塩谷の佐藤勝治氏屋敷の裏手に30数基の古碑群がある。山が崩れて土砂に埋ったものが沢山あるのでそれらを加えると大変な数になる。この地の古碑群の特長として、次の3つが挙げられると思う。

その1は、紀年号の殆どが南北朝期から室町期にかけてのもので、応永（1395年頃）の年号のものが圧倒的に多いことである。河北地区に於ては室町期のものが密集するのはこの地だけである。



長塩谷の古碑群（北上町長塩谷）No.1



長塩谷の古碑群（北上町長塩谷）No.2

その2として、この地の板碑の形式が極めて小型で、しかも素朴であるのが特長である。板碑は一般には地方の権力者、或は豊裕な者の善根の所産とされる中にあって、この地のものは明らかに庶民の手によってなされたものであり、その点、往古の民衆と宗教の結びつきを知る上に貴重な資料と言えよう。

その3として、古碑群の中には時宗関係のものが多く、異色なものとして「西願」という人の名が刻まれた碑が6基も見られることである。

西願は「親鸞聖人門侶交名牒」の中にもその名が見え、奥州浅香住の中にも西願ありと伝える記録もあり、浄土真宗の名僧であった。どのような経路で西願の碑が存在することになったのかは今後の研究課題であるが、南三陸の一僻地に斯る供養碑が見えるのは往古の宗勢と文化を知る上でまことに意義が深い。

## 相川おいせ峯古碑群

位 置 北上町相川（旧十三浜村），町の東北  
約 6 km

### 概 説

相川の小学校裏にある古碑群である。この地の碑は鎌倉後期から南北朝期にかけてのもの20数基を数え年代的には最も他地区のものと似ている。しかし、その中には梵字だけの十六仏逆修碑が見られるのは珍しく、町内にその例がない。



おいせ峯古碑群（北上町相川）



大指の古碑群（北上町大指）

## 大指古碑群

位 置 北上町大指（旧十三浜村），町の東北  
約 8 km

### 概 説

大指浜の北面の山裾に立つ。  
大指部落の中心部を貫流する小川から掘り出したものと、近くの長者森、その他埋没數を合せると數十基にのぼる。年代は鎌倉末期から南北朝までであるが、南北朝になると殆ど北朝の紀年号である。中には時宗の名号碑も見られる。

## 山居寺古碑群

位 置 北上町追波（旧十三浜村），町の南西 約3km

### 概 説

追波部落の西 200m，佐々木正雄氏宅の裏山には，義経伝説にまつわる山居寺のあとがある。この跡，山裾から山頂にかけて10数基の古碑群が見られる。何れも室町時代のものである。中でも压巻なのは寺院の土壇（祭壇？）あとに立つ「奉為妙旭禪尼卒哭忌」と記された古碑の存在である。供養をうけた妙

旭禪尼という女性は，追波峠館主の奥方と伝わり，この碑は室町中期のものと推定される。ともあれ「卒哭忌」形式の供養碑は当地方では唯一で珍しい。

付近には義経伝説の「小森御前」の明神社祠もあるし，山居寺の寺池から鎌倉時代の作と見られる完全な形の茶臼が掘り出されるなど，歴史の深さを物語るものが多い。



山居寺の古碑群 (北上町追波)

## 線刻六地蔵像古碑

位 置 北上町相川（旧十三浜村），東北約  
5.5km

### 概 説

相川釜の坂の畠の中に立つ角柱が六地蔵の碑で、古くよりこれに触ると不祥事が起るとされて来た。角柱の三面には六地蔵尊が線彫りにされているが、側面に各一体、正面に四体、合わせて六体（六地蔵）となる。その彫りは室町期独特の素朴な線彫で、おそらく素人の作と思われる。

正面の地蔵の下には「喜山恵光逆修、文禄三年（1594年）甲午卯月五日」と二行に記されていて、喜山恵光という人が逆修供養（生前に死後の往生安樂を願って供養）のため立てた一種の供養碑であることが判る。ともあれ、当方に文禄年間いわゆる室町末期に立てられた六地蔵供養碑は絶無で、当時の宗勢、文化の程度を知る上にまことに貴重である。

は梵字で（カ）と読み、地蔵の意味である。また喜山恵光については本吉郡階上の曹洞宗の名僧だと伝えもあるがくわしくは知り得ない。



線刻六地蔵の碑（北上町相川）



修 駿 者 の 碑（北上町長尾）

## 修 駿 者 の 碑

位 置 北上町長尾（旧橋浦村）、町の西南約  
5km

### 概 説

長尾松岡神社の境内（石階の中段）に立つ。寛永6年己巳（1629年）の刻みが見える。江戸時代初期の修駿道の碑としては当地区唯一のものである。

## 南山の大乗妙典塔

位置 北上町白浜（旧十三浜村）、町の東北約3km

### 概説

17代藩主、伊達重村に迎えられ、瑞鳳寺14世となった古梁紹珉（南山と号す）は藩政末期の名僧として知られ、詩書をよくし儒学にも通じ、数々の逸話をこした。

この石碑は古梁（南山）が「大乗妙典塔」と見事な隸書で書いた大乗妙典の一宇一石塔

で白浜の北端に立っている。この碑は県下でも珍らしいモクゲンジの大樹の下に立ち、高さ4m、巾1.2mにも及ぶ巨石である。

〔注〕一字一石塔

別名「経塚」とも称されることが多く、経文の一宇を一つの石にそれぞれ墨書して埋め供養した。



南山の大乗妙典塔（北上町白浜）

# 古墳

## 月浜古墳群

位置 北上町月浜（旧十三浜村）、町の西約0.3km

### 概説

月浜地区役場の西200mの丘陵、ここは現在杉林、畠、墓地となるが、この丘陵上二ヶ所にわたって14基の古墳群が存在する。形式は円墳であるが半円状に割石を積み上げた積

石墳とも言える。

その年代は9世紀（平安初期）と推定され、飯野川の和泉沢古墳群との対比の意味でもその発掘調査が期待される。



月浜古墳群（北上町月浜）



長塩谷古墳（北上町長塩谷）No.1



長塩谷古墳（北上町長塩谷）No.2

## 長塩谷古墳

位 置 北上町長塩谷（旧十三浜村），町の北東約3km

### 概 説

長塩谷のうち現在の白浜ホテルの建つ台地の西下の山腹部に3基の円墳がある。その中の代表的なものは高さ約2m、径6mもあり、中央部には丸形の石がすえられている。

この古墳は、この地方では「文覚上人」の姉の墓と伝承され、これに触わると死に至るとか不吉が起るとして畏怖されて来た。地方の伝説には、この墓の主（姫君）は時として白浜の體という地名の断崖に立ち、付近を航行中の船に向って指呼することがあるという。呼ばれた船は物の怪にとりつかれのようにびたりと静止し、合図があるまでは動くことができない。このような鄙びた物語がある。

また、太平洋戦争中、東京の小笠原子爵家から「同家の先祖の姫君の墓が長塩谷にあり、そこには家宝の刀剣が埋まっている」との書翰があり、古記録の写しも添えてあったが、里人は後難を恐れ、誰一人としてこの墓（古墳）を掘る者がなかったという。

# 貝塚

## うつぼ貝塚

位 置 北上町相川（旧十三浜村），町の東北  
約 6 km

### 概 説

相川中学校の麓，中島氏屋敷の表にある。  
計画的に発掘されではないが，宅地造成付  
帯工事の際，縄文時代の石器，土器，骨器な  
どが出土している。



う つ ぼ 貝 塚 （北上町相川）No.1



そ の 出 土 品 （北上町相川）No.2

# 建 築

## 古式の民家

位 置 北上町本地字喰迫（旧橋浦村），町の南西約7km

### 概 説

喰迫の今野徳氏の屋敷は古建築としては当地区有数のもので、県の「宮城の古民家」にも集録されている。「安永風土記」にも一7代相続、喰迫屋敷肝入武右衛門一と見え、同家の付近は「肝入ほら」と古称されて来た。家系団には既に元和年間から肝入をつとめた

と書かれ、その歴史は極めて古い。

本屋敷の坪数は72坪もあり、屋敷の入口には長屋門がある本格的な構えで、上家の梁間は4間、前後に下屋廊が一間ずつ付く。間取りは田の字の4間取りに、しかも手に2室が加わった古式家に見られる6間取りで、200年以前の建築と評価されている。



古式の民家（北上町本地）



南 部 神 樂

## 南 部 神 樂

位 置 北上町長塩谷大室、相川(旧十三浜村)  
町の東北 2~6 km

### 概 説

早池峯山修験道に伝承された山伏神楽である。当地の長塩谷、大室、相川などに保存されてきたが、後繼者が少なく衰微の一途をたどって来た。しかし最近、飯野川高校十三浜分校の生徒会のクラブ活動により復活しつつあるのはまことに明るいニュースである。

### 〔注〕南部神楽

岩手県早池峯山をめぐる修験団のみに伝承されてきた山伏神楽が、明治初年修験制廃絶後、農民の間に生じたそのまねごと芸が広まり諸社の祭りに参与するようになった。これが南部神楽で、山伏神楽の神事芸能を中心、義経や田村麿の伝説に取材した新演目を加え独自のレパートリーをもった。岩手県南部地方、宮城県北内陸部に広く流傳している。

## 法 印 神 樂

位 置 北上町相川(旧十三浜村)、町の東北  
約 6 km

### 概 説

相川地区には法印神楽が保存されて来た。法印とは修験者、山伏のこと、当地への伝来は明治以降、本吉郡神楽として、志津川町の戸倉より入ったとされている。当地的法印神楽は南部神楽と比べ、やや古典的なものであった。南部神楽同様、新時流にそわないものとして顧られることは少なかつたが、これも飯野川高校十三浜分校生徒会の手により復活されつつあるのはよろこばしい。

# 器物

## 茶臼

位置 北上町女川（旧橋浦村）、町の西約5km  
北上町月浜（旧十三浜村）、町の中心部



茶臼 江林寺所蔵（北上町女川） No. 1

### 概説

茶をひいて抹茶をつくる石臼のこと。平安時代から用いられてきた。茶臼は上等の飲料、薬用品の製造具であるから一般の農家ではなく、当地区では女川の江林寺、月浜の相沢家（追波の山居寺の池から発掘されたもの）だけでもことに貴重である。尚、山居寺のものは完全な形であり、鎌倉時代のものと推定されている。



茶臼 相沢良一郎氏所蔵（北上町月浜） No. 2

## 木するす（木磨臼）

位置 北上町大室（旧十三浜村），町の東北  
約5km

### 概説

大正年間までの農家では穀すり用に主に土製の磨臼を使用した。木製の磨臼の使用は耳にしないところである。大室浜の佐々木次内氏家には木製のものがこっている。形や寸法は土製のものとほぼ同じだが、用材として松の目のつんだ（年輪のこまかい）ものを使っているのが特長である。



木するす（木磨臼）（北上町大室）No.1



木するす（木磨臼）（北上町大室）No.2

## 香木

### 唐木（沈木）

位置 北上町大室、町の東北約4km

### 概説

北上町大室浜に現存する。

寛政8年6月7日（1796年）唐國（現中国）廣東の漁船1隻、唐人（中国人）14人乗りが大室浜に漂着、その時この丸印（印）の唐木（沈木）がこの船に納めてあった。

同年10月20日中国へ向って出発、無事送還された。一説には密貿易船との言い伝えもある。



唐木（沈木）（北上町大室）

# 美術、工芸

## 経 箱

位 置 北上町相川（旧十三浜村）、町の東北 約6km

### 概 説

相川の中島富四郎氏所蔵のもので、大きさは、たて23cm、よこ8cm、高さ7cmの経巻収蔵用の箱で、革張りの逸品である。尚、表面に施された唐草紋様も見事である。

この経箱には白紙銀泥の経巻が収められていて、その経巻の表紙、見返ともに三藏法師の絵が描かれていたと伝わるが、惜しむらくは昭和8年の津浪の際紛失してしまった。



経 箱（北上町相川）No.1



金泥大般若経（北上町相川）No.1

## 紺紙金泥大般若經

位 置 北上町相川（旧十三浜村），町の東北約6km

### 概 説

相川の中島富四郎氏宅に紺紙に金泥で書かれた大般若經の写経文が所蔵されている。表紙には大般若經第二百八十八と記され、見返絵には仏功德の図が同様に金銀泥で描かれている。どのような経路で同家に入ったのかは不明であるが、平泉中尊寺の経堂より流出し

たものとも考えられ、隣町の志津川町にも県指定となる同様の大般若經が存在するところと合わせ、今後の調査鑑定に期待したい。同家のものは昭和8年の津波の被害で下端部が変色しているものの形はほぼ完全に等しく、その意味でも貴重である。



紺紙金泥大般若經（北上町相川）No.2

# 文書

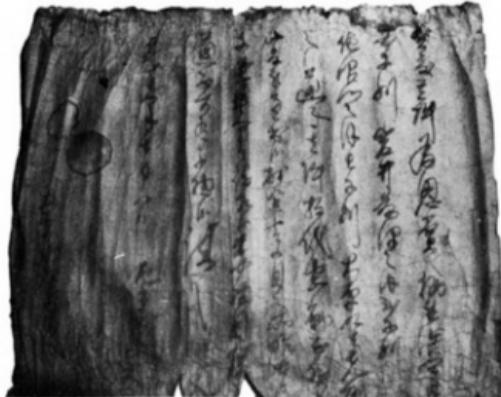
## 葛西晴信書状

位 置 北上町追波（旧十三浜村）、町の南西  
約2km

### 概 説

追波の佐藤賢太氏屋敷は東磐井郡の豪族、  
大原氏の正統の家格で、明治維新後に佐藤と  
改姓したと伝わり、同家には数々の文書が所  
蔵される。

ここに挙げたのは天正18年に葛西晴信が發  
行した書状と、その家伝重宝目録である。晴  
信書状の（その1）（その2）には葛西家滅  
亡の年（天正18年）家運保持のため奔走する  
情景が切々とこめられている。



葛西晴信書状 (北上町追波) No. 1

今度其許為思賞之桃生郡深谷之内  
五千刈岩井藤沢之内二千刈  
佐沼郷之内七千刈大原郷者先例  
之通也其許數代忠勤不淺候  
此度被差出候砂金宅貰目之所昨七日  
千葉隼人より請取候委細目録之  
通不可有子細候謹言

天正十八年七月八日

左京太夫 (花押)

大原飛驒守殿



葛西晴信書状 (北上町追波) No. 2

急度申遣候去月十七日  
差出され候飛札被見  
之所應々京都衆より状  
相遣れ誠に悦喜ニ候  
佐沼在陣之折柄當  
表弥二以而神妙也  
千葉甲斐守以下  
利府表出張可申  
其許以下軍勢  
佐沼在陣当月五日  
限りに致候様可然候  
如斯申入候 謹言

天正十八年八月一日  
左京太夫晴信 (花押)



葛西晴信書状 (北上町追波) No. 3

## 大原文書

位 置 北上町追波（旧十三浜村），  
町の南西約2km

### 概 説

追波の佐藤賢太氏宅に所蔵される大原文書の一つに戦国時代の戦術暗号簿と推定されるものがある。珍しいので掲載した。これには和歌19首、伊勢物語などが書かれ、それをつなぎ合わせて味方に命令を伝えるしくみになっているのだという。

その他、大原氏の系譜なども所蔵され、岩手県史では既に紹介されている。

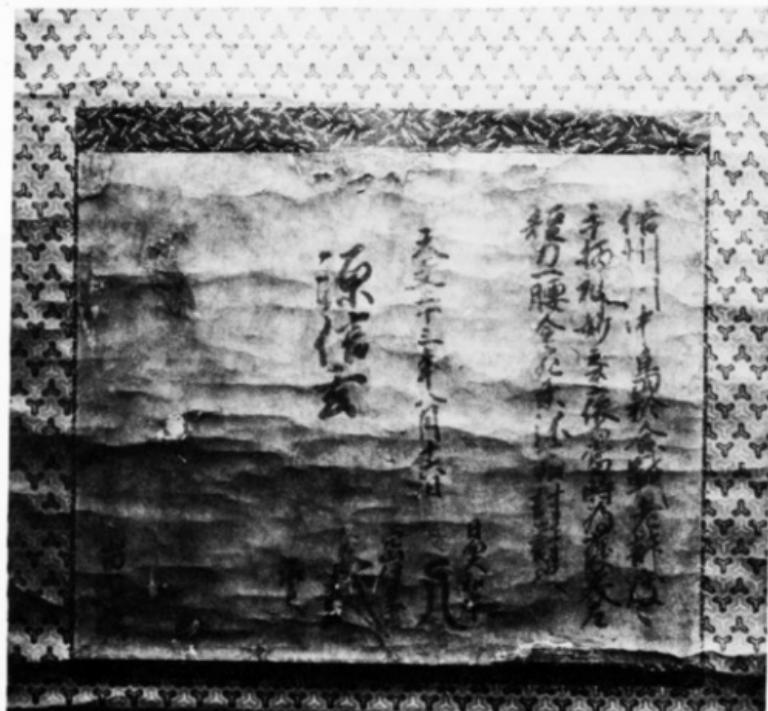


大原文書（北上町追波）No.1



大原文書同上訳記（北上町追波）No.2





武田信玄書状（北上町上大須）

### 武田信玄書状

位 置 北上町上大須（旧橋浦村），町の西南  
約 5 km

#### 概 説

上大須の遠藤孝雄氏宅に所蔵される文書で、信玄の墨書と花押があり、年号は天文23年8月16日（1554年）である。内容は川中島合戦の論功行賞で、山田監物にあてた感状である。同家に入った経路は、白石片倉家が当地を支

配したとき、片倉家中に武田家臣（山田某？）が居って、その家より出たと伝わる。その他に短刀一腰ある。

本書状は文体や様式上に多くの疑問があり、真偽の程は今後の研究に待つところが大きい。

# 民間信仰

## おこない様

位 置 北上町十三浜北部地区（旧十三浜村），  
町の東北 6～7 km

### 概 説

おこない様を祭る家は、小泊から小指浜にかけてあり、本書には次の4軒から取材した。

佐々木 孝志（小泊）

佐 藤 林（小室）

千葉 正二郎（＊）

遠藤 毅（小指）

以上の人々の屋敷はともに家歴の古い本家格で、家業は半農半漁で、現在も養蚕を行っている。おこない様と呼ばれるものは包頭形の人形の一種で、一对から二対あり、大きさは32～35cmもあり、竹製である。平常は箱に納めて神棚に祭るが元旦の朝下して箱を立てて飾りや供え物をし、室内中で拝む。飾ると新しい赤い布又はモミ（絹）のイショ（衣裳）をきせる。大事な神なので当主だけが祭り、家の中では四足二足の動物の肉は食べない。当地方のものは巫女は関係しないようだが、その歴史に不明な点が多い。

### [注]

蚕神は一般にオシラ神あるいはオシラサマと呼ばれ、東北地方では寺や神社に祭られ、または巫女の家や地域によっては普通の民家に祭られる。男女二神を表わす桑の木でつくった神体に衣裳をまとわせたものが多い。蚕神（おこさま神）がおこない様に転訛したのであろう。



おこない様（北上町十三浜）

## 釜 神 (かまとど神)

位 置 北上町一円

### 概 説

主として江戸時代に建てられた古い民家にはかなりの数の釜神が見られた。しかし現在は新築ブームに乗り、殆ど消失したのは惜しまれる。

写真の（1）は追波の佐藤栄藏氏屋敷のもので木製、（2）は橋浦本地の岡本氏屋敷のもので土製である。

左図



釜 神 (北上町追波) No. 1



釜 神 (北上町橋浦) No. 2

### [注] 釜神

古い時代、新築のかま柱に家の入口に向けこの面をとりつけ、悪魔、病魔に睨みをきかせ、その退散を願った。また、火の神、室内安全の神として台所の荒神棚に三宝荒神と合祀することもあったが、神仏が混淆して形式は複雑で不定形となる。当地方の場合、土製の面の目や歯には鮑貝や硝子を使うことが多い。

# 旧跡



烟屋遺跡（北上町女川）No.1

〔注〕 ●たら吹き

独特の製鉄技術である。粘土で箱型の炉をつくり、木炭と砂鉄を交互に入れ、炉の横につけた鞴（たら）から風を送り、三昼夜吹き続けて銑鉄をつくった。当時は炉内の温度が低いため鉄分が未だ含まれた鉱滓が沢山残ったという。

●烟屋のシステム

烟屋（製鉄所）は蒲が監督し、専門の鐵山師が仕事を進めるわけだが、職掌は砂鉄取り、造炭、製鉄の三部門に分れ、分業とそれぞれの職分が厳しい大集団であった。最高責任者を主立、製鉄所を烟屋と言った。

## どうや 煙屋遺跡

位置 北上町女川字中原（旧橋浦村）、町の西約5km

### 概説

女川中原の西麓に規模の大きい烟屋のあとがのこっている。「風土記」にも女川村の製鉄の記録がでてくるが、ここはその代表的な場所であったろう。この地は砂鉄、木炭、水が豊富があるので、最適の立地条件をそなえていたと言える。

本遺跡は江戸時代後半のものと想像でき、当時の製鉄技術を「たら吹き」と称した。



烟屋遺跡（北上町女川）No.2



塩 煮 釜 場 跡 (北上町大指) No. 1

### 塩 煮 釜 場 跡

位 置 北上町大指字猪浜（旧十三浜村）、町の東北約8km

#### 概 説

大指の猪浜には縄文後期の遺跡のうちに塩煮釜場のあとが判然と認められる。かまどの粘土と、それについた苦汁で固った土が現存する珍しい遺跡である。勿論、付近からは同時代の土器が沢山採取できる。



塩 煮 釜 場 跡 (北上町大指) No. 2

# 古木



もくげんじ (北上町白浜) No.1

## もくげんじ (樂草)

位 置 北上町白浜小泊地区 (旧十三浜村),  
町の東北 3 ~ 5 km

### 概 説

白浜、小泊地区には渡来植物である、もくげんじの自生が見られる。中でも白浜からリアス海浜ホテルの丘への登り口の所にそびえる木は県下一の巨木である。

樹高約20m、目通り1.75m、枝の広がり約15m、樹令推定 150年。



もくげんじ (北上町白浜) No.2

### 〔注〕もくげんじ

むくろじ、むくれにし、せんだんばのぼだいじゅ、などの異名がある。むくろじ科の落葉喬木。種子は球形で黒くかたい。寺院などで栽培され、種子は主として数珠を作るに用いる。



た　ぶ　の　木　(北上町小泊)

### たぶの木 (いぬぐす)

位 置 北上町小泊 (旧十三浜村), 町の東北  
約 5 km

#### 概 説

十三浜の海浜部の丘には暖帶植物のたぶの木が自生している。中でも小泊部落の北部、古碑群の入口には、当方隨一の巨木が天をおおって聳る。この木は古碑群をいつくしむ姿如の大樹でもある。

樹高約 20m, 目通り 3.2m, 枝の広がり約 25m, 樹令推定 300年。

#### [注] たぶの木

くすのき科の常緑の大高木で高さは13m位になる。暖い地方の主として海岸地帯に多い。葉は有柄で互生し、枝の先に集って着き、革質で厚くやや光沢がある。いぬぐすと呼ばれる理由は、くす(樟)に似ているがくすではなく木質が劣っているためである。



### 老 梅

位 置 北上町小泊 (旧十三浜村), 町の東北  
約 5 km

#### 概 説

小泊の佐々木孝志氏の邸内に幹が複雑に入り組んだ形の老梅が2本ある。ここは小泊の古碑群を背後にひかえ、小泊城址を眼前にした景勝の地で、老梅の存在は深い歴史と景観にマッチして奥ゆかしい。

ともに樹高約 15m, 目通り 1.2m, 枝の広がり約 8 m, 樹令推定 500年。

老 梅 (北上町小泊)

# 自 然

## や ち (川中瀬のかや谷地)



や ち (茅谷地) (北上町南部) No. 1

位 置 北上町南部（旧十三浜地区）、町の南  
西0.5～2 km

### 概 説

北上川河口付近の流路に堆積したいわゆる沖積層のこと。河口付近は水流がゆるみ、満干による潮の上下があるため、上流から運ばれた土砂が堆積し、広大なやち（一種の三角州）を形成された。土質が肥沃なためもとは上質の米を産出したという。北上川の改修工事にともない、新北上川として、北上川の水が旧河道に放出されるに及び、広大なやちも次第に狭小となり、現在のような姿に変貌した。

みちのくの大河の河口にふきわしい広漠として静かなたたずまいである。



や ち (茅谷地) (北上町南部) No. 2

## 南三陸自然公園

位置 北上町十三浜北部（旧十三浜村）、町の東北約10km

### 概 説

十三浜の北部海岸地帯は南三陸自然公園としてとみに人々に知られるようになった。中でも北上町と志津川町の境に位置する「神割崎」は有名である。神割崎は半島部突端部の奇勝で、海中に突き出た岬が海蝕によって二

つに割れ、満潮時にはこの割れ目から海水が噴きだし雄壮な姿を呈する。シーズンにはキャンプ地、ハイキングコースとして人々の入来で、大いにこの地は活氣づく。



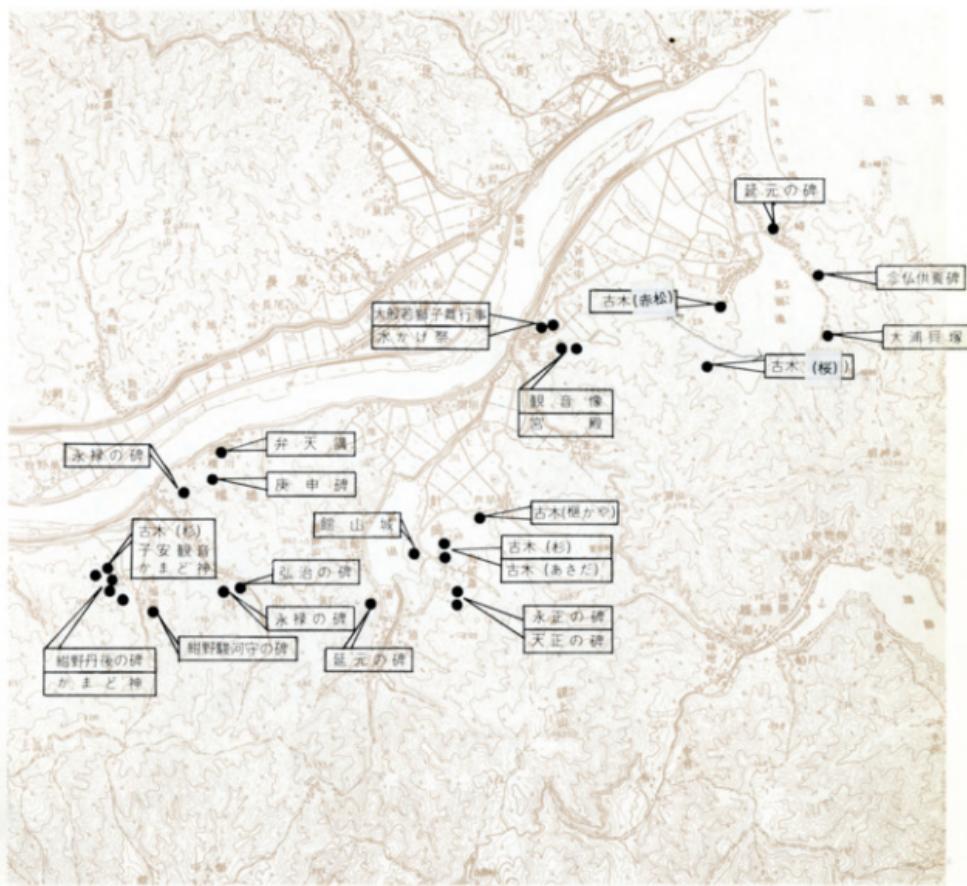
南三陸自然公園（北上町十三浜）

## 河北町の部

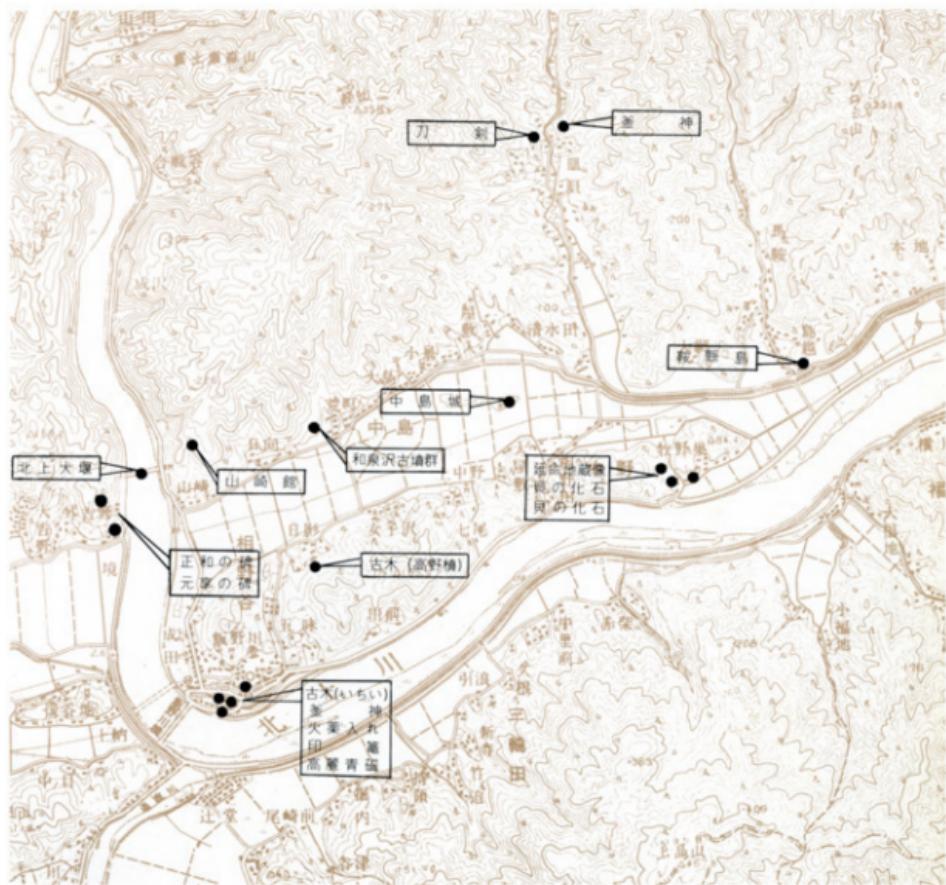
古 城 館 ( 横 ) 址	58
古 碑	64
古 墳 群	77
貝 塚	79
旧 跡	79
仏 像	80
建 築	82
民 間 信 仰	83
武 具, 美術工芸	89
奉 納 額	91
文 書	92
古 木	93
化 石	100
自 然	101

注 位置を表わす「町の北約○km」或は「町の南約△km」は、それぞれの町役場の所在地を基点としての距離です。

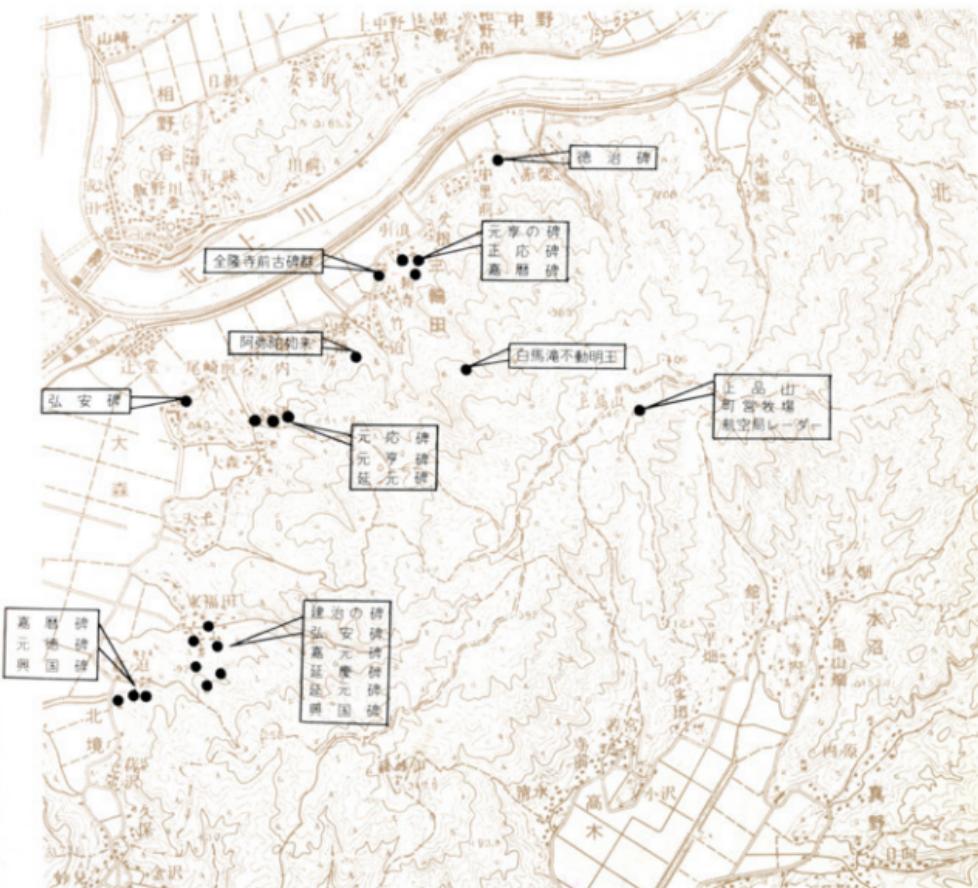
## 河北町大川地区の文化財



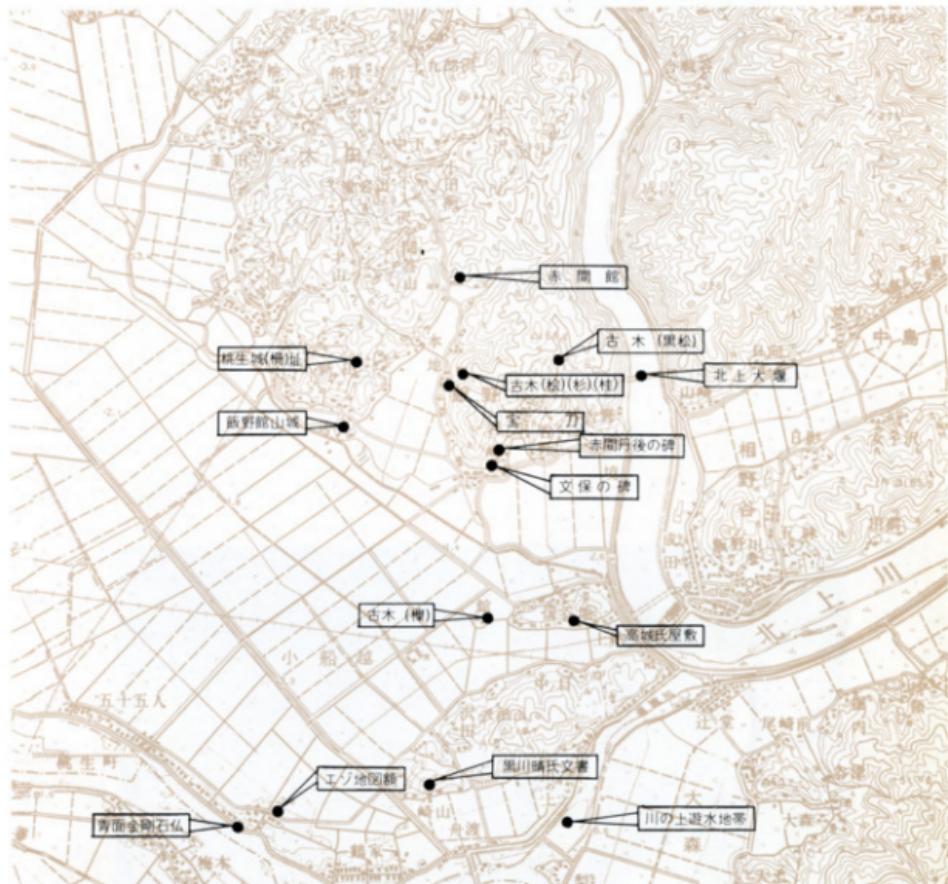
## 河北町飯野川地区の文化財



## 河北町二俣地区の文化財



## 河北町大谷地地区の文化財



# 古城館(柵)址

## 桃生城(柵)址

位置 河北町飯野字中山長者森(旧大谷地村)

町の西北約4km

由緒 陸奥の国府多賀城の北に対する政策の拠点として造営されたところで、統日本紀の天平宝字4年の条に「陸奥国牡鹿郡に於て大河に跨り、峻嶺を凌ぐ桃生柵を作る」とその壮大な、しかも堅固な城柵を築いた記録があるのは有名である。しかし、その後の蝦夷による動乱期以降の記載はなく、改廢の歴史の流れは不明である。

設置 桃生城の造営上の記事は天平勝宝9年(757年)に見えるが、本格的な造営は天平宝字2年(758年)ごろからと見られ、同4年に完成したらしい。

### 概説

○桃生城の造営については国司郡司ら指導者、軍士、蝦夷の俘囚など広範囲にわたり大きな力を結集して行われたのは勿論だが、牡鹿の豪族、道嶋氏一族の協力態勢が大きくものと言ったと伝わる。

○当地方には古くより桃生城の推定地として注目された所が数ヶ所あった。ここ長者森の台地上もその一つで、布目瓦や須恵器が集中的に発見され、長く続く土壘の高まりなども発見されるなど、学者、地方史家の間では最近は最も有力視されていた。

○昭和49年、50年の両年にわたり、主として多賀城調査研究所のスタッフの手により発掘解明の手が加えられ、古代の城柵としての確



桃生城址内部 (河北町飯野) No. 1



### 桃生城址外部（土塁の部）（河北町飯野）No.2

証が得られ、以来マボロシであった桃生城址がにわかに世の注目を集めることになった。

○その主なる發掘所見は次の通りである。

本遺跡は外郭と内郭より構成され、外郭線が土塁、内郭線は築地である。その規模は、800m 平方と推定できる。内外両郭をもつ遺跡の性格は、古代の行政官庁としての城柵跡とするのが妥当である。また土師器が少く、須恵器が多く出土するのもその傍証となる。

尚、この遺跡の外郭線が土器でできている

のも一つの特徴であり（他の城柵は殆ど築地、柵木による）。その外郭線の占地も尾根線上を設定してまわっているのも從来東北地方には見られぬもので、唐、新羅に対して防衛基地として創建された九州の怡土城址に酷似しているという。この桃生城も蝦夷地に対する実戦的城柵の意味があつたのだろう。

尚、本遺跡は県指定の文化財は勿論、全城が解明され、国指定の史跡となる日も近いことであろう。



その出土品（河北町飯野）No. 3

## 山崎城址

位置 河北町山崎（旧飯野川町），町の北約  
2 km

### 概説

山崎部落の北面の山のうち、西側、国道筋北上大堰をのぞむ断崖上に山崎館のあとがのこっている。「あと葛西」と称された葛西氏の末裔、葛西俊信が1,000石の封を得てここに住んだのは寛永4年（1627年）と伝わる。この山城に何年住んだのか確かではないが、俊信の子、重常はのちにこの城館を降り、町の中心部旧高等学校の校地のところに館を構えて移った。この「あと葛西氏」は飯野川の町の開発の祖といわれ、源光寺にあるお靈屋は今なお里人の崇敬を集めている。

標高約200mの山頂に構えられた山崎館址には今でも200坪位の平場とか、空濠あとがのこっている。後世ここは軍馬の放牧地となつた所と伝わり、今にのこる本丸部の杉の巨木（古木の部参照）は俊信の手植えと伝わる。



山崎館址（河北町山崎）

『風土記』に「山山崎館」として東西15間、南北60間、右館主は葛西紀伊守重俊入道流斎と申す御方、天正年中まで御居住——とあるが、実際はその子、俊信の時代、寛永年間から住んだものと思われる。

## 中島城址

位置 河北町中島（旧飯野川町），町の北東  
約4 km

### 概説

一名、鶴ヶ館、或は首藤館ともいう。

中島部落の南面に浮島のように耕土の中にうずくまる小丘、現在、稻荷神社、八雲神社が鎮座する高さ約10m、東西200m、南北70mほどの独立形の丘が中島城のあとであつた。往古は耕土一帯が北上川の流路にあたり、この城はその中に浮かぶ島（注、中島の地名の

根据か？）であったという。「仙台領古城書上」には、東西72間、南北20間である。

この城館は七尾城の合戦、即ち永正年間（1511～1515年）の葛西氏対山内首藤氏の合戦に当つては、山内首藤方の大将貞通の弟、作戦主任とも見られる首藤清通（別名、江田七郎）が築いた所と伝わり、七尾城の一大拠点となつた。しかし、同12年、山内首藤方が敗績し一族四散の運命をたどつた。

「観蹟聞老志」「封内名蹟誌」などに「首藤但馬守居住し、後國分彦九郎盛重亦是に居る」とある。



中島城址（河北町中島）



針岡館山城址 (河北町針岡) No.1



針岡館山城址 (河北町針岡) No.2

### 針岡館山城址

位 置 河北町針岡字鳥屋森(旧大川村), 町の東約10km

#### 概 説

鳥屋森の部落の西、富士沼の東岸に位置する高さ約20mの小山がその址で、郭は南北両方の頂上部に見られる。東西約50m、南北約200mの島嶼状の小山を中心に造られ、四周を水で囲まれた水域の形式で、当時は北上川流路と連絡した入江の奥に位置し、舟で出入したものであろう。

葛西氏家臣、平塚将監の居城で「古城書上」「封内記」などにその記録が見える。室町時代に設置、使用された。

## 飯野館山城址

位 置 河北町飯野字新田（旧大谷地村），町の西北約4km

### 概 説

飯野新田の南面に位置する小さな独立形の丘が館山城のあとである。今は頂上部は宅地や耕地に使われている。高さ約20m、東西約150m、南北約100m程の平山城の形式で、往古はその直ぐ南面が北上川の流路に当っていたので、水際に構えられた城館であったと想像される。「仙台領古城書上」に東西25間、南北16間とある。

城主は不明だが、「古記」に飯野但馬守、逸見摂津伊顯などの名が見える。両者ともに葛西家臣だと伝わる。



飯野館山城址 (河北町飯野) No.1



飯野館山城址 (河北町飯野) No.2

## 赤間城址

位置 河北町飯野字本地（旧大谷地村），町の西北約4km

### 概説

大谷地から桃生町入沢に越える「飯野越坂」の峠の東側，現在の赤間正一氏屋敷の裏に控える杉山の頂上部に明瞭な中世山城の形がのこっている。

高さ約80mの山頂には直径約100m程の円形平場，そして東方に一段下がり径70m程の平場がある。ここが本丸，二の丸と推定されるが，この郭を中心にして同心円状に壇や濠が3~4段めぐる。総合的には東西250m，南北200m程の壮大な輪郭式状となるが，この形は室町末期に流行した山城の典型であって，その形が破却されずのこるのはまことに貴重と言わねばならない。



赤間館址（河北町飯野）

「古記」に飯野村の分として「西山城」の名が見えるが，果してこの赤間城と一致するかどうか今のところ分明ではない。地方の伝えにはここのが城主は赤間某で，現在，当方に栄える赤間氏の祖だと言われている。

## 高城氏屋敷址

位置 河北町小船越字後谷地（旧大谷地村）  
町の西1.5km

### 概説

大谷地の小船越の後谷地山の南麓に伊達家臣，高城氏の屋敷あとがある。

高城氏は留守相模守顯宗に発する名族で，伊達一族，今の松島高城を基盤に栄えたので高城を称した。

小船越への転封は，寛永13年（1636）三代直吉の時代と伝わり，以来，維新にいたる220年間，450石を領し当地に君臨した。今は廃屋となり，荒れた広い庭，松の巨木に昔の榮えを偲ぶのみである。



高城氏屋敷址（河北町小船越）

# 古 碑

## 弘 安 の 碑

位 置 河北町三輪田字尾崎（旧二俣村），町の南約1.5km

### 概 説

尾崎の山の神碑が立つ一画にある。弘安八年二月十日（1285年）の刻みがかろうじて判読できる。

高さ 137cm, 幅 32cm。



正 応 の 碑 (河北町三輪田)



弘 安 の 碑 (河北町三輪田)

## 正 応 の 碑

位 置 河北町三輪田字引浪（旧二俣村），町の東約2.5km

### 概 説

引浪の狩野庚氏持山の一角にある。正応四年十一月（1291年）の刻みが見える。

高さ 185cm, 幅 48cm。

## 徳治の碑

位置 河北町三輪田字小迫（旧二俣村），町の東約3km

### 概説

三輪田小迫の日野光男氏宅地内にある碑で、徳治二年丁未卯月廿五日（1307年）の刻みが見える。

高さ 150cm，巾 58cm。

種子は大日三尊を表す。石も大きく彫りも大きく堂々としている。



徳治の碑（河北町三輪田）

## 嘉元の碑

位置 河北町東福田（旧二俣村），町の南約4km

### 概説

東福田の鈴木松治氏の裏山に立つ、線刻五輪塔形式の供養碑。

嘉元三年三月廿六日（1306年）の刻みが見える。高さ 110cm，巾 29cm。



嘉元の碑（河北町東福田）

## 延慶の碑

位置 河北町東福田（旧二俣村），町の南約4km

### 概説

東福田の佐々木啓氏宅地裏に立つ。延慶三年四月（1310年）の刻みが見える。

高さ 115cm，巾 37cm。

〔注〕延慶は（えんぎょう）と読む。

## 正和の碑

位置 河北町成田字境（旧飯野川町），町の西約1.5km

### 概説

境の開墾碑（慶長、元和年間）は有名である。実はその開墾碑の裏側（年代的にはこちらの方が表側）を調べると、正和三年三月下旬（1314年）の刻みが見られ鎌倉末期の板碑であることが判る。この碑を板碑と知ってか知らずか、慶長、元和頃の人々が利用し、その裏に開墾の碑文を彫ったものである。

高さ 197cm，巾 70cm，厚さ 20cm。

## 文保の碑

位置 河北町岩崎（旧大谷地村），町の西北  
約3km

### 概説

岩崎センター脇の高橋寿一氏旧墓地の中に立つ。文保元年十一月二十五日（1317年）の刻みが見える。

高さ81cm，巾40cmの小さな供養碑で亡母十三回忌の供養の文が記されている。



文保の碑（河北町岩崎）



元応の碑（河北町三輪田）

## 元応の碑

位置 河北町三輪田字谷津（旧二俣村），町の南約1.5km

### 概説

三輪田谷津の日野久吉氏宅地内にある。元応二年二月時正（1320年）の刻みが見える。

高さ90cm，巾43cm。

〔注〕断碑となり、今はコンクリートで接いである。時正是秋の彼岸の中日をいう。

### 元亨の碑 No.1



元亨の碑 (河北町成田)

### 元亨の碑 No.2

位置 河北町三輪田字谷津 (旧二俣村), 町の南約1.5km

#### 概説

三輪谷津の日野久吉氏宅地内にある。元亨二年八月時正 (1322年) の刻みが見える。

高さ 113cm, 幅 23cm。

断碑となり今はコンクリートで接着固定している。

### 元亨の碑 No.3

#### 嘉歴の碑 No.3

位置 河北町東福田字倉の迫 (旧二俣村), 町の南約4km

#### 概説

倉の迫の鈴木勝典氏神祠前に立つ題目碑である。妙法蓮華經嘉歴二年八月廿三日 (1327年) の刻みが見える。

高さ 128cm, 幅 43cm。

〔注〕線刻五輪塔形式で、河北町内の題目板碑としては最も古い。

位置 河北町三輪田字引浪 (旧二俣村), 町の東約2.5km

#### 概説

三輪田引浪の狩野庚氏持山山林内にある。元亨二年三月 (1322年) の刻みがある。

高さ 100cm, 幅 31cm。

## 嘉曆の碑 No.1 No.2

位置 河北町三輪田字引浪（旧二俣村）町の東約2.5km

### 概説

三輪田引浪狩野庚氏持山山林内、もと二俣小学校三輪田分校の直ぐ裏山に二基の嘉曆の碑がある。

No.1 嘉曆元〇七〇（1326年）の刻みが見える。高さ100cm、巾45cm。

No.2 嘉曆二年七月廿日（1327年）の刻みがある。高さ85cm、巾38cm。



嘉曆の碑（河北町三輪田）No.1 No.2

## 元徳の碑

位置 河北町東福田字倉の迫（旧二俣村）、町の南約4km

### 概説

倉の迫の道路の傍に立つ。南無妙法蓮華經元徳三年七月一日（1331年）の刻みが見える題目碑である。

高さ90cm、巾27cm。



延元の碑（河北町三輪田）

## 延元の碑 No.1

位置 河北町針岡字浦（旧大川村）、町の東約10km

### 概説

浦の道路わき山根のところに立つ。延元元年丙子十一月二日（1336）第三十五日と刻まれている。

高さ67cm、巾27cm

〔注〕延元は南朝年号。



延元の碑 (河北町三輪田) No.2

### 延元の碑 No.2

位置 河北町三輪田字谷津（旧二俣村），町の南約1.5km

#### 概説

三輪田谷津の日野久吉氏宅地内には数基の古碑にまじり、延元元年丁丑八月時正（1337年）と刻まれた石がある。

高さ 82cm, 幅 26cm.

### 延元の碑 No.3

位置 河北町東福田（旧二俣村），町の南約4km

#### 概説

東福田の鈴木松治氏裏山にあり、延元第三戌寅五月廿四日（1338年）の刻みが見える。

高さ 118cm, 幅 59cm.

〔注〕線刻五輪塔形式の石である。

### 延元の碑 No.4

位置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

#### 概説

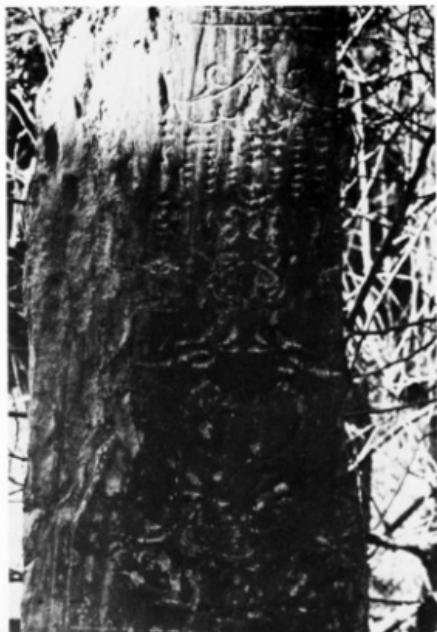
尾崎の海藏庵境内入口に立つ。延元三年（1339年）の刻みが見える。裂碑。

高さ 80cm, 幅 65cm.

〔注〕延元三年は四年と同じ。四是死に通ずるので三年と分離した。



延元の碑 (河北町尾崎) No.4



興 国 の 碑 (河北町東福田) No. 1

### 興 国 の 碑 No. 1

位 置 河北町東福田 (旧二俣村), 町の南約  
4 km

#### 概 説

東福田の長泉院山門入口路傍に立つ。興国四年癸未如月日 (1343年) の刻み, 儀, 頤文が見える。

高さ 230cm, 幅 38cmの堂々たる碑で、五大種子の図案化で五輪塔が彫られ、特に上部には天蓋とを配し、下部には偈、頤文を刻んだまことに見事な碑である。

〔注〕河北町では南朝年号の最後のものだといふ。

### 興 国 の 碑 No. 2

位 置 河北町東福田字倉の迫 (旧二俣村),  
町の南約 4 km

#### 概 説

倉の迫の道路の傍に立つ。興国二年 (1341年) の刻みが見える。

高さ 68cm, 幅 19cm。

## 全隆寺前古碑群

位 置 河北町三輪田字上垣（旧二俣村），町の東約2.5km

### 概 説

全隆寺山門付近には興国（1340年頃），応安二年（1369年），応永十四年（1407年）などの古碑が立つ。

付近の引浜，持領のものよりやや年代が下がるが，三輪田地方一帯に点々とかかる供養碑が連続するのは往古の北上川筋の人々の往来と，その集落の繁栄を物語るものである。



全 隆 寺 前 古 碑 群 (河北町三輪田)

〔注〕河北町内には未だ未だ古碑が多く発見されているが，本資料集では鎌倉時代～南北朝時代のものは一応，興国（1340年頃）までで打ち切り，それ以降のものは掲載を略した。

以下の古碑は，その数が少なく，珍らしさとされる戦国時代のもの，或は江戸時代の供養碑の中より選び，統けて掲載した。

## 弘治の碑

位置 河北町福地字大福地（旧大川村），町の東約6km

### 概説

大福地芳賀真直氏宅の裏，街道脇に立つ石碑で，この地方唯一の巨碑である。

右志者，弘治三年弥生十八日誌（1557年）の刻みが見える。

高さ 374cm，巾 85cm，厚さ 15cm。

安永風土記に「碑面法花經供養の文字とも有之」とある。



弘治の碑（河北町福地）

## 永禄の碑 No.1

位置 河北町福地字大福地（旧大川村），町の東約6km

### 概説

大福地芳賀真直氏宅裏，街道脇に弘治の碑と並んで立つ。

永禄五天壬戌卯月十一日（1562年）の刻みがあり，碑の下段には願文が記されている。

高さ 133cm，巾 79cm，厚さ 8cm。



永禄の碑（河北町福地）No.1



永 祿 の 碑 (河北町福地) No.2

## 永 祿 の 碑 No.2

位 置 河北町福地字大福地（旧大川村），町の東約6km

### 概 説

大福地千照寺脇の旧墓地内の一一番奥の所に立つ。

見溪受觀禪尼三十三忌之為，永祿庚申（三年）（1560年）の刻みがはっきり見える。

高さ 136cm, 幅 43cm



永 正 の 碑 (河北町針岡)

## 永 正 の 碑

位 置 河北町針岡字鳥屋森（旧大川村），町の東約10km

### 概 説

鳥屋森松山寺墓地内に立つ。

受禪禪定尼永正五華（1515年）の刻みが見える。

高さ 63cm, 幅 17cm。

この墓は別記天正の碑と同様，足利開東公方の孫の足利義久がこの地に亡命し，その子孫のものであったと伝わる。

〔注〕永正五華は十二年の意であろう。



天 正 の 碑 (河北町針岡)

## 天 正 の 碑

位 置 河北町針岡字鳥屋森（旧大川村），町の東約10km

### 概 説

鳥屋森松山寺墓地内にある。

松山貞公禪定門為者也，干時天正十三季乙酉六月九日（1585年）の刻みが見える。

高さ 52cm, 幅 28cm。

これはこの地に亡命した足利義久の子孫の墓と伝わる。松山貞公禪門とあるので，この寺の創設に関係した人であろう。

## 紺野氏の供養碑

位 置 河北町福地字小福地（旧大川村），町の東約6km

### 概 説

小福地部落の山裾に立つ江戸時代初期の供養碑。

No.1は、今野安政氏屋敷の南面の山下にある紺野駿河守の供養碑で、万治二己亥年九月二日（1659年）の刻みが見える。今野忠雄氏の祖のものとして同家で祭祀している。

No.2は、紫桃千代寿氏屋敷の西の山腹に祭られる紺野（一説に狩野）丹後の四七日の石塔婆で、延宝五年丁巳四月二十一日（1677年）の刻みが見える。この碑は紫桃植氏の祖のものとして同家で祭祀されて来た。

両碑ともに、当地に栄えた福地首藤氏の家臣今野氏の供養碑と見られ、往古の様態を知る上に貴重である。



紺野氏の供養碑（河北町福地）No.2



紺野氏の供養碑（河北町福地）No.1

## 赤間丹後の碑

位 置 河北町岩崎（旧大谷地村），町の西北約3km

### 概 説

岩崎センター上、山内委氏屋敷裏山、旧墓地内に見られる江戸初期の供養碑。高さ約1m、巾30cm。

寛文拾庚戌年五月二十五日（1670年）の刻みがあり、くわしく供養の願文がほらされている。この碑は赤間丹後が願主とする逆修（自分の死後の安穩を祈り、生前に建立する）の碑で珍らしい。

赤間丹後と名乗ったこの人は、中世、飯野越坂わきにあった赤間館の館主の子孫で、江戸時代に入ってもこの地方の権者として羽振りをきかせた一族の者であろう。

## 庚申碑

位置 河北町福地字町（旧大川村），町の東  
約8km

### 概説

横川の西端、小西山の登り口（所有者 紫桃正隆氏）の平場にあり、上向きに倒れいでいるので目につきにくい。

寛文四年甲辰月（1664年）とあり、頤文には庚申供養の意がでている。正確にはこの年は庚申の年ではないが、甲辰の年を庚申に当たるものであろう。ともあれ、庚申の供養碑としては、この地方では最も古く珍重である。

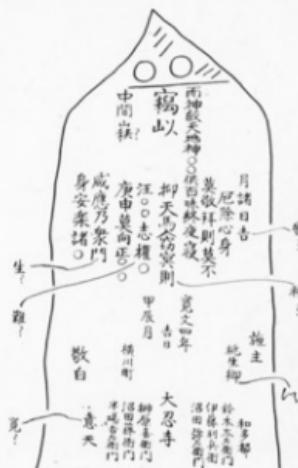
また碑の下段には施主として、おそらく大忍寺の檀徒であろうが、鈴木太左衛門、伊藤利兵衛その他苗字もちの人が大勢ならんでいる。当時の繁栄を知る貴重な資料である。



庚申碑（河北町福地）



赤間丹後の碑（河北町岩崎）





念仏供養碑（河北町尾崎）

### 念仏供養碑

位 置 河北町尾崎（旧大川村），町の東約16km

#### 概 説

尾崎浜の南端、木下庄策氏屋敷の前庭の一角に立つ念仏碑で、元禄十一年二月十六日（1698年）建立のもの。碑高195cm、巾90cm、厚さ30cm。

南無阿弥陀仏の刻みが正面にあるので浄土宗関係の供養碑のようにも思われるが、偈（げ）の文意には多分に禪宗的ニュアンスが感じられるので一概には断定できない。

この碑の立つ所は高さ2m程の塚（小山）となり、その頂上部にはこれとは別の南無妙法蓮華経と刻んだ享保年間の角柱の碑が立ち、その文意から、或は地方の伝えなどから推す

と一字一石の経文の石を埋めたいわゆる「経塚」であったことが判る。

江戸時代まではこここの塚の下まで渚が迫り、ここが尾崎浜の入口であったという。

それにも況して注目したいのは、この念仏碑を建立した施主たちである。碑の下段には20名の尼たちがその名を連ねているが、彼女たちは一体何者であったのだろう。そして尾崎浜とどのような関わりがあった者たちであったろうか。当時の尾崎の文化、宗勢を知る上において、この碑は多くの謎をふくみ貴重である。